

初期新高ドイツ語辞典作成の現場から

その他のタイトル	Zwischenbericht über die Erstellung eines frühneuhochdeutsch-japanischen Glossars
著者	工藤 康弘
雑誌名	独逸文學
巻	52
ページ	77-82
発行年	2008-03-19
URL	http://hdl.handle.net/10112/12932

初期新高ドイツ語辞典作成の現場から

工藤 康弘

0. はじめに

14～17世紀のドイツ語を初期新高ドイツ語と呼んでいる。その名前からしていかにも単なる過渡的な言語段階のような印象を与え、古高ドイツ語、中高ドイツ語、新高ドイツ語と肩を並べるほどの存在感はない。文学史的にも、華やかな中高ドイツ語文学とゲーテ・シラー時代のはざまにあって、顧みられることが少ない。とはいえ、すでに19世紀からこの第四の言語段階を研究対象とする考え方はあった。筆者自身は学生時代、Johannes von Teplの „Der Ackermann aus Böhmen“ (1400年頃) を授業で読んだのが、初期新高ドイツ語との出会いである。当時のノートを見ると、もっぱらレクサーの中高ドイツ語辞典を引いていたことがわかる(手前味噌になるが、ノートの書き込みを見る限り、当時の辞書の引き方は今と変わらない。若い時分によくあれほど細かに調べていたものだと思う)。その後Alfred Götzeの „Frühneuhochdeutsches Glossar“ の存在を知り、大いに利用するようになる。Götzeの „Glossar“ は小型ながら利用価値が高い。初期新高ドイツ語を日本語で説明する辞典を作ろうと考えたとき、必然的に „Glossar“ がモデルとなった。

1. コルプスの収集

辞書作りの基本的な方針が固まったのは、筆者が1996年4月から1998年3月まで、客員研究員としてハイデルベルク大学にいたときであった。de Gruyter社から „Frühneuhochdeutsches Wörterbuch“ が分冊の形で現在も刊行中で、ハイデルベルクのOskar Reichmann教授が編集の陣頭指揮をとっていた。この大辞典の資料となったのがハイデルベルクコルプスで、時代、地域、テキスト種を考慮して選ばれた約550冊のテキス

トから構成されている。どのテキストもたとえば「16世紀東中部ドイツの神学テキスト」のように特徴づけられている。筆者はこのコルプスを縮小した形で日本へ持ち帰ろうと考え、準備作業を行なった。たとえば14世紀西上部ドイツの年代記から1つ選ぶとすればどれがいいかを、実際に本を見ながら判断し、選んだ。こうして希望図書の一覧を作ったあとは、1年間コピー取りに励んだ。コピーは順次船便で日本へ送り、結局約160冊を日本に持ち帰った。無事届けられた小包は、事務室に山積みになっており、リヤカーを借りて研究室に運んだが、その姿はさながら鬼ヶ島から宝を運んで帰る桃太郎であった。

2. 具体的な作業——理想と現実

さて、持ち帰ったコルプスをどう料理するかであるが、まず利用する資料は14～17世紀のドイツ全域（東中部、東上部、北上部、西中部、西上部）における文学テキストに限定した。辞書作りの第二段階はこれらの資料から語を抽出することである。一つの方法としてテキストの巻末に付いている語彙表を利用することが挙げられる。もちろんこれを見越して、語彙表の付いているテキストを選んであるが、中には意味の記述が少なく、単なる索引に近い場合もある。そのときはテキストを読み、独力で意味を確定しなければならない。最も難儀な作業である。

2.1 表記法の統一

ともあれ語彙の収集が始まった。集めた語彙を整理しておくためにAccessというデータベースソフトを用いた。紙のカードに書き込む感覚で使えるので、語彙の情報を書き込んでいく分には便利であるが、いろいろ問題もある。紙のカードは目安をつけてめくっていけば、一度書き込んだものに行き当たるが、Accessの場合は検索をしなければならない。ところが初期新高ドイツ語というのは言語的な規範が確立されておらず、同じ語でも表記法がテキストによって、また同一テキスト内でもばらばらである。handとhantとhanntをそれぞれの表記で書き込んだら、カードが3枚になってしまう。従って検索を可能にするため、また出来上がる辞書のためにも、表記法を統一しておかなければならない。結

局、現代語に近い表記を採用することにした（たとえばgehen, liegen, gott）。これはde Gruyterから出た辞典とほぼ同じである。たださまざまなテキストを読んでいると、Götzeの „Glossar“ における表記法（たとえばgen, ligen, got）のほうが、初期新高ドイツ語の実態に近いのも確かであり、今でも上の判断が正しかったかとなると自信がない。

2.2 参照する文献の数

さて、一つの語の意味を確定するまで、どのような作業が必要であろうか。作業はAccessのフォームという画面で行なう。この画面は自由にレイアウトでき、筆者の場合は「見出し語」「作業」「意味」の3つの領域に分けた。参照した文献のメモはすべて「作業」に書き込み、それらを勘案して確定した意味を「意味」の欄に記す。最終的には「作業」の部分を切り捨て、「見出し語」と「意味」の部分をプリントアウトすれば、辞書の体裁となる。

作業はまずテキスト巻末の語彙表の意味を書く。その後は小学館独和大辞典コンパクト版、Götzeの „Glossar“、Christa Baufeldの „Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch“ (Niemeyer)、de Gruyterから出版された初期新高ドイツ語辞典、レクサーの中高ドイツ語辞典、グリムのドイツ語辞典の記述を書く。記述がない場合は「なし」と書く。小学館の辞典に記述されている場合は現代語とみなし、原則として筆者の辞書には採用しない。ただし「古語」「雅語」という標識がついている場合は採用する。これら種々の辞典の記述を勘案して、最終的に意味を確定する。初めの頃は上の手順に従って作業を進めていた。Götze、Baufeld、レクサー、グリムなどの記述がびっしりと書き込まれた「作業」の欄は壮観である。しかし、このようなことをしていたら辞書が完成するまで何十年かかるかわからないということもやがてわかってきた。そこで精度を維持しながらいかに「手を抜く」かを考えざるを得なくなった。すべての辞書を読んだあとに判断するということはやめ、ある程度調べて「わかった」と感じた時点で、「意味」の欄に記入するようになった。これで若干スピードアップした。ちなみにテキストの原文にも基本的に目を通してはいる。何百年も前のドイツ語のほんの数行だけいきなり読んで語の意味を把握するのは決して容易ではない。泣く泣く意味の確定を断

念して「保留」と書き込むこともある。これが現在まで続いている作業である。

3. 初期新高ドイツ語の語彙

初期新高ドイツ語の体系的な論述は別の機会に譲り、以下では語彙に関して気づいたことを2つ述べたい。

3.1 造語法

ドイツ語は接頭辞や接尾辞が意味の違いを表したり、またときには品詞の区別をはっきりさせる。この点、初期新高ドイツ語は接辞を徹底して利用しているようには見えない。動詞は前綴りのない基礎動詞だけの場合も多い。そうした例をまず挙げる。ring (= gering)、mach (落ち着いて、ゆっくりと = gemach)、letzen (= verletzen)、mehrten (= vermehren)、niessen (使う、利用する = genießen)、schmack (匂い、香り = Geschmack)、statten (許す = gestatten)、sünden (= sündigen)、tören (うっとりさせる = betören)、warten (期待する = erwarten)、zag (臆病な = zaghaft)

現代ドイツ語は接辞によって、また語尾変化することによって品詞の区別がかなりはっきりしている。これに対して、上記のように接辞が少ない初期新高ドイツ語では、たとえば名詞 müde (疲れ) などは形容詞との区別がつかない。テキストの中でこうした語に出会ったときに感じる不安感、いらいら感は、語尾変化が少ないこともあって品詞の区別があいまいな英語を読んでいるときの不安感に似ている。

他方、初期新高ドイツ語には逆に現代語にない接辞を用いた語もある。vorteilig (= vorteilhaft)、lehrung (= Lehre)、peinkeit (罰、償い)、sammentlich / sammenhaft (= zusammen)、unmutigkeit (= Unmut)、weislich (賢い = weise)

このように造語法においては、この時期のドイツ語は流動的な姿を見せてくれる。

3.2 類義語・反意語の併記から見えてくるもの

初期新高ドイツ語のテキストには二、三の類義語や反意語を併記する

現象がよく見られる。このおかげで、しばしばある語の意味の確定が容易となる。いくつか例を挙げて説明したい。下線部が注目したい語である。

zanken und kriegen / steuer und hilf / der hencker oder der nachrichter:
kriegen (戦争をする)、Steuer (援助)、Nachrichter (刑吏) は今では古語であるが、上の例ではそれぞれ類義語と併記されているので、その意味とわかる。

miete und gabe: *Miete*はこの時期、「贈り物」を意味していた。「賃貸料」の意味が出てくるのはもっとあとの時代である。

kauflüt (= Kaufleute) und kunden: ここにおける*Kaufleute*は「商人」ではなく、「買い手 (Käufer)」、「店の客」である。

leicht und ring: *ring*は3.1で述べたように、現代語の*gering*に相当するが、意味は「すぐに」「容易に」である。

bosheit und leckerei: *Leckerei*は「おいしいもの」ではなく「卑劣な行為」「悪徳」「非行」である。同じく*unkeuschheit und leckerei*という表現もあり、こちらはかつてある訳本で「不身持ちと食道楽」と訳した。

4. まとめ

初期新高ドイツ語の語彙の収集は浜の真砂を数えるがごとき作業で、いつまで続けても達成感を得るのは夢の夢と思っていた。しかしある時期から多少状況が変わってきた。苦勞して集めたのだから、みな頭に入っていて「単語力」がついたと思うのは大間違いで、多くは忘れてしまっている。そこで辞書に収録したい語があるときは、まず検索してすでに入っているかどうかを確かめる。最初の頃は検索してもむなしくなるほどヒットしなかった。しかし収録語数が多くなるにつれて、検索にひっかかるようになる。検索にひっかかるということは、辞書を引いたときに調べたい語が見つかるということにほかならない。かくして、集めた語が3000語を超えたあたりから、パソコンにせっせと詰め込んできたものが、曲がりなりにも辞書として機能することを発見した。こうなると、いつしか自分自身もこの語彙集を利用するようになっている。

現在パソコンには5000語ほど入っている。辞典としては少なすぎる

工 藤 康 弘

が、「小辞典」「語彙集」としては使えるかもしれない。計画から10年以上経ち、まわりにも迷惑をかけている。そろそろまとめるべきかと思うが、多忙を極める大学の仕事は、なかなか時間を与えてくれない。これが一番の難敵である。